

海外三曲公演の先駆け—初代中尾都山と米川琴翁夫妻のロシア旅行

福田 千絵

1. はじめに

尺八家で都山流の流祖である初代中尾都山（1876 - 1956）と、地歌箏曲家の米川琴翁（1883 - 1969）、輝子（1895 - 1967）夫妻は、1915（大正4）年に、第一次世界大戦で甚大な被害を被っていたロシアに、傷病兵慰問という名目で赴き、40回余りの演奏を行なった。これは、一流の三曲演奏家によるヨーロッパ公演の先駆けとなるものである¹。この旅行については、『都山流百年史』（都山流史編纂委員会1998）を始めとする都山流の各年史には旅行の概要が記されているが、文献の性格上、流員以外にはほとんど知られていないと思われる。一方、三曲関係の文献においては、管見の限り、簡潔に触れられるにとどまり、かならずしも正確な記述がなされていない²。しかし、都山の日記および旅行記を紐解くと、ロシアの要人や芸術家から高い評価を受けており、単に慰問のためだけの旅行とはいえない側面が浮かび上がってくる。また、米川夫妻の箏三弦の役割が大きかったこともうかがえる。本稿では、日記と旅行記をもとに目的と計画、および演奏曲を考察し、この旅行を再評価したい。

第1の資料となる都山の『西伯利亚及欧露満州朝鮮旅行日記（以下、『日記』とする）』は、主として行動記録で、演奏会の設定の経緯や聴衆の様子、曲名と楽器編成が記されている。原本は都山流尺八楽会本部（京都）が所蔵しており、本稿では資料1に示した中尾正治（都山の長男）による翻刻を使用した。また、第2の資料となるのは、都山流の会報『都山流楽報（以下、『楽報』とする）』に掲載された旅行の関連記事、旅行記および写真である（資料2および3）。旅行記は、道中の記述や聴衆の反応に関しては都山中心に描かれているが、移動や演奏会の日時、曲名と楽器編成は箇条書きで記されている³。そのほかの資料としては、当時の新聞で、輝子の書簡や取材に応じた際の談話が掲載されたものがあり、音楽雑誌『音楽界』にも短い記事が数回、掲載されたものがある（資料4）。

【資料1】中尾治正による『日記』の翻刻の所載

| 引用時の略記 | 翻刻タイトル | 『楽報』掲載号 | 『日記』の期間 |
|----------|------------------------|------------|---------------|
| 中尾 1959a | 笹屋集記 西伯利亚及欧露、満洲、朝鮮旅行日記 | 471号：3-6 | 7月30日～8月21日 |
| 中尾 1959b | 同上 二 | 472号：3-7 | 8月22日～9月12日 |
| 中尾 1960a | 同上 三 | 475号：3-6 | 9月13日～9月30日 |
| 中尾 1960b | 同上 四 | 476号：10-13 | 10月1日～10月13日 |
| 中尾 1960c | 同上 五 | 478号：3-6 | 10月14日～10月26日 |
| 中尾 1960d | 笹屋集記 | 480号：3-5 | 関連記事 |
| 中尾 1963 | 笹屋集記（一七） | 498号：6-9 | 1916年の満州旅行記事 |

【資料2】『都山流楽報』に掲載された旅行関連記事

| 掲載号と頁 | 記事タイトル | 備考 <筆者名> |
|-----------|-----------------------|--------------------------|
| 74号:43 | 消息 竹琳軒都山 | 都山の予告記事 |
| 74号:45 | 牧野都直改号直山昇格祝賀演奏会番組 | 演奏会プログラム |
| 74号:59-61 | 会場の一隅から一直山氏昇格披露演奏会の | <TH生> |
| 74号:61-62 | 福島樓の雅宴—盛なる都山師歓迎会 | |
| 75号:1 | 都山師一行を送る | |
| 75号:23-24 | 西比利亜渡航に際して | <中尾都山> |
| 76号:41-49 | 露国へ!露国へ!—都山師一行の露都行 | 旅行記1 |
| 76号:50-53 | 露国人の眼に映じたる日本音楽及音楽家 | 新聞記事と感謝状 |
| 76号:58-59 | 京都駅に立つて | 会員による見送りの記事(京都鴨朋会員ともむら生) |
| 77号:47-57 | 大平原を駛走しつゝ—都山師一行の露都行消息 | 旅行記2 |
| 78号:2-3 | 帰朝せる都山師を迎ふ | |
| 78号:44 | 日本演奏会 | 10月1日の演奏会プログラム |
| 78号:56-78 | 故国へ!故国へ!—露都から大阪帰着迄 | 旅行記3 |
| 78号:79 | 茅海樓上の歡声—盛んな都山師歓迎会 | |
| 79号:13-16 | 感想録 | <中尾都山> |

【資料3】『都山流楽報』に掲載された旅行関連写真

| 掲載場所 | 写真タイトル |
|----------|---------------------------------------|
| 75号巻頭 | 宗家都山師と同行して露領西比利亜に渡航せられたる箏絃家 米川親敏 米川輝子 |
| 76号巻頭 | 鳳山丸甲板上に於ける都山師一行 |
| 78号巻頭 | 本野大使夫妻 |
| 78号巻頭 | 往路の一行 |
| 78号巻頭 | 露都芸術家連の自著 |
| 78号巻頭 | 日本赤十字病院 |
| 78号巻頭 | モスクワ市芸術家連の自著 |
| 78号巻頭 | 皇后宮病院の感謝状 |
| 78号巻頭 | 記念のアルバム |
| 78号巻頭 | 露国外務大臣の感謝状 |
| 78号巻頭 | 一行の慰問せしモスクワ市商業協会病院 |
| 78号巻頭 | モスクワ市より贈られたる感謝状 |
| 79号巻頭 | 露国の初冬(本野大使より都山師へ贈られたる自筆) |
| 80号巻頭 | 情溢るゝ白菊の花—都山師一行とモスクワ市長及日本領事館員 |
| 80号41-42 | モスクワ市会の謝意 |
| 81号巻頭 | 露西亜に於ける都山師の塑像 |

【資料4】その他の旅行関連記事

| 掲載雑誌および掲載新聞 | 記事タイトル | 備考 |
|----------------------------|---|---------------------------|
| 『音楽界』167号:68-69. | 米川氏の渡露 | 予告 |
| 『音楽界』169号:94. | 露国皇后病院慰問演奏 | 9月26日の演奏会 |
| 『音楽界』170号:95. | 中尾都山一行 | 帰阪の報告 |
| 『音楽界』172号:66. | 莫斯科市長より謝辞 | |
| 『大阪毎日新聞』1915年7月25日朝刊11頁5段. | 中尾都山氏の露国行 三曲合奏の音楽旅行 | 予告 |
| 『大阪毎日新聞』1915年10月28日朝刊7頁5段. | 中尾都山帰る 露都はまるで病院街大歓迎を受く | 下関到着の報告 |
| 『大阪毎日新聞』1915年10月29日朝刊7頁3段. | 露都から帰った輝子女史 都山一行の箏曲家 | 輝子の談話 |
| 『読売新聞』1915年10月19日朝刊4頁2段. | 露国に於ける日本音楽の名手 傷病兵の慰問に名曲の演奏 到る処で喝采される日本館 | 輝子が近親に宛てた手紙 |
| 『読売新聞』1915年11月21日朝刊4頁5段. | 目出度き帰朝 露都より雪の中を帰った琴曲の名手 | 添付写真「露都にて本野大使の撮影せる米川輝子女史」 |
| 『読売新聞』1919年5月31日朝刊4頁5段. | 箏曲の名家来る 戦乱の露都で傷病兵に音楽を聴かせ歓迎された | 親敏の2度目の上京を記念する演奏会の予告記事 |

2. 初代中尾都山と米川琴翁夫妻

初代中尾都山は、尺八の二大流派のひとつ「都山流」の創立者である。1896年に都山流を創始し、当初、大阪を拠点に活動したが、1915年の時点ではすでに全国に支部をもち、国内を飛び回る毎日であった。1922年に本拠を東京に移した。近代的な楽譜を用い、試験登用制度を確立し、多くの新曲を発表し、尺八の近代化に大きく貢献した。

米川琴翁は、当時は本名の親敏で活動していた（以下、本稿では親敏とする）。全国に支部をもつ、生田流箏曲と地歌の会派「研箏会」の創立者で、演奏家、作曲家、指導者として精力的に活動し、生田流協会の前身である生田会の会長も務めた。岡山県で育ち、1900年代には東京において第一線での演奏活動を始めていたが、箏三弦の教授を請われ、1912年から19年まで兵庫県姫路市に滞在した。姫路滞在中は、都山の直弟子である牧野直山（1874 - ?）と、互いの会に出演するなど親しい間柄であった。妻輝子は、東京での親敏の門下生で、1912年に親敏と結婚し、旅行の前年には長女敏子（1913 - 2005）をもうけていた。

旅行直前の1915年6月に牧野が都山流の昇進試験に合格した際、記念の演奏会が催され、親敏は地方を務めたが（『楽報』74号：45）、そこで客演の都山と共演したのが、都山と親敏のはじめての出会いのようである。旅行の翌年に行われた都山の満州朝鮮旅行の際は、親敏の妹文子の結婚と時期が重なったため、親敏は同行できなかつたのだが（中尾1963：6）、都山と親敏は、その後も、近畿の演奏旅行、レコード録音、互いの演奏会などにおいて、数多くの共演を行った。

【表1】ロシア旅行の行程

| | | | | | |
|-------|-------|------------------------|--------|-------|-----------|
| 7月30日 | 6:55 | 梅田発 | 10月4日 | 14:00 | モスクワ着 |
| 7月30日 | 12:57 | 敦賀着 | 10月12日 | 16:50 | モスクワ発 |
| 7月31日 | 17:50 | 敦賀発 | 10月23日 | 夜 | 長春着 |
| 8月2日 | 11:00 | 浦汐ス徳（現ウラジオストック）着 | 10月24日 | 12:00 | 長春発 |
| 8月15日 | 17:40 | 浦汐ス徳発 | 10月25日 | 19:30 | 京城（現ソウル）着 |
| 8月16日 | 24:00 | ハ爾賓（ハルピン）着 | 10月26日 | 19:50 | 京城発 |
| 8月22日 | 0:50 | ハ爾賓発 | 10月27日 | 6:40 | 釜山発 |
| 9月4日 | 10:00 | モスクワ着 | 10月27日 | 17:40 | 下関着 |
| 9月6日 | 21:40 | モスクワ発 | 10月28日 | 6:21 | 姫路着 |
| 9月7日 | 11:00 | ペトログラード（現サンクト・ペテルブルグ）着 | 10月28日 | 15:00 | 姫路発 |
| 10月3日 | 23:50 | ペトログラード発 | 10月28日 | 17:19 | 大阪着 |

*『日記』をもとに福田が作成した。経由地は省略し、主として宿泊した都市をあげた。森田がすでに指摘しているように（森田1999：6）、京城以降の行程について『日記』と『楽報』で相違が生じている。『日記』では、京城発が26日、帰阪日不明、『楽報』では、京城発が25日、帰阪日27日。本稿では、「二十七日午後六時関釜連絡船にて下関に帰着（『大阪毎日新聞』10月28日）（資料4）」を根拠に、『日記』と同じ立場を採った。

3. 旅行の目的と計画

旅行の行程は、7月30日から10月27日まで3ヶ月に及んだ（表1）。しかしながら、この行程は当初からこのように計画されていたのではなかった。

旅行の発端は、『楽報』にみることができる。1915年6月の彙報を記した記事には、「八月上旬より避暑を兼ね作曲工夫の為何処へ旅行の筈（『楽報』74号：43）」⁴とあった。

ところが、以下に引用するように、出発に際しての都山の寄稿「西比利亚渡航に際して（75号：23-24）」では、避暑と独奏曲作曲のための旅行を希望していたものの、第一次世界大戦という世界情勢を

考慮し、音楽による世界貢献を目指し、傷病兵慰問を目的としてロシア東部へ向かう決意が示された。最初の旅行記にも「初め一行は浦潮市より黒龍江に沿って同州を巡遊し哈爾濱に出づる予定なりしも(76号：49)」と記されている。これが最初の計画変更となる。なお、一行の出発を知らせる音楽雑誌の記事では、「一行は浦潮哈爾濱其他の各都市に恤兵音楽会を開き都合によりて露都へ赴くやも知れず(『音楽界』167号：68-69)(下線は筆者)」と記されていた。当時は、義捐金を募る慈善目的の恤兵音楽会が国内で盛んに行われていたので、海外へ赴く名目として適当なものであったのかもしれない。

前号予告の如く、予は今年の夏を冷しい海辺か山間の幽静な地を選んで暑さを避け、其処に於て一二新曲を物したいと考へて居つた。そは『寒月』以来『朝霧』其他の合奏曲は兎に角、独奏曲に全く遠ざかつて居たから一門の希望もあり方々独奏曲創作の爲めである。然し静に考察すると、世界は今、禅家の所謂『動』の部に属している。～中略～例へば国家が赤十字看護隊を英、佛、露の諸国に派して我邦の主義実力を世界に示すと同じく、自分は純粹の邦楽を彼国民に紹介して彼我音楽の上に国際的印象を残して置きたいと思ふ。

更に日本帝国々民として考ふれば、今は軍国の際である。呑気な避暑旅行に時を費やすべき場合ではない。さらでだに日露親善促進の必要は朝野に叫ばれつゝある今日、眇たる日本の一音楽家が友国の傷病兵慰問の爲めに邦楽を提げて渡航すると云ふ事は、直接間接、彼の国人に与ふる印象の頗る大なるべきを信ずるのである。(下線は筆者)

此計画を立てたのは去る六月二十日、牧野直山君の昇格披露演奏会の爲めに姫路に赴き、当日地の相手をされた米川親敏君と話した結果、何か有意味な避暑旅行をと考へて、遂に同氏同道今回の渡航をする事に決したのである。～後略～(75号：23-24)。

上記の引用から、旅行の計画が立てられたのは、出発のわずか40日前であったことが明らかである⁵。また、この旅行は、私的な演奏旅行であったことも明らかで、実際、日記末尾には簡単な出納が記されており、中尾治正も「招聘ではなく～自費をもって」と明確に指摘している(中尾1960d：3)。なお、旅行の発端について、都山の伝記を著した田中義一は、稽古場の家主の紹介で本野駐露大使の仲介を受け、平民音楽使節としてモスクワを訪問することになったとしている。田中はこれとは別に、親敏の妹文子が都山と北陸に演奏旅行へ赴いた際に思いついたという説も紹介しているが(田中1989：133および147)、『日記』および『楽報』をみる限りでは、どちらの説も論証し得ない。

さて、旅行は、その後、首都ペトログラードまで旅程が延ばされた。これが2度目の計画変更となる。『日記』によれば、ウラジオストックで、西へ赴く手立てを探していたところ(『日記』8月4日「西本願寺太田覚眠師を訪い、西比利亚奥へ旅行の事等依頼」)、商用でモスクワ、ペトログラードに赴く実業家島定治郎氏(1877-1935)に勧められて同行することになったという(『日記』8月13日)。田中は、ウラジオストック滞在中に本野大使のことを思い出して頼んだという説を紹介しており(田中1989：147)、これはあり得ることかもしれない。最初の旅行記の末尾には「予定変更」として、「露国有志の懇篤なる勧請と、実際見聞せる露国現下の状態に鑑み、～中略～露都ペトログラードに直行同地にて露独境戦線より収容せられたる傷病兵を見舞ひ、帰途モスコウに立寄り、数日間滞在(76号：49)」と記され、次号では、ペトログラードを9月21日に出発し、モスクワに1週間、10月10日頃から長春と大連、京城に3、4日滞在という予定が発表された(77号：56-57)。

さらに、ペトログラード滞在中に、3度目となる計画変更がなされた。78号の旅行記の最終部分の記述をみると、ペトログラード滞在が10月3日まで延長され、大連には立寄らず、京城滞在も短かった。

77号の内容は9月16日時点とみられるので、9月17日以降に急遽、変更されたとみられる。

以上のように、短期間に再三にわたって計画が変更され、結果的にヨーロッパの東端に達する、3ヶ月に及ぶ旅行が実現したことになる。当時は、海外旅行に尻込みする音楽家も少なくなかった。この旅行の実現には、都山と、同行した米川夫妻の冒険心と行動力があったといえるであろう。

4. 演奏の概要

さて、旅行中の演奏に目を向けてみよう。曲名あるいは曲数が明らかで、試演や個人的なお礼も含めた改まった形式での演奏は、表2に示したように、計48回にのぼる。過密なスケジュールで、なかには1日3回行われたこともあった。以下、各演奏は表2の[]による番号で表す。演奏は、おもにウラジオストック（6回）、首都ペトログラード（26回）、モスクワ（12回）の3都市で行われた。ここでは、どのような演奏が行われたのかについて、上記の3つの都市別に考察していきたい。

ウラジオストックでの演奏は、試演会→邦人主催の演奏会→慈善演奏会への参加、という順序であった。ここでは、ロシア人に演奏を聴かせ、ロシア人との交流も図られ、地元の新聞にも批評が掲載されるなど、一定の成果を挙げたといえる。『日記』によると、都山は連日、現地の新聞社、日本領事館や邦人の銀行、商社等を訪ねており、その過程で演奏会が生まれ、ロシア人の聴衆を獲得できたのであろう。

ペトログラードとモスクワでは、試演会→慰問演奏→申し込みによる慰問演奏→歓迎演奏会、という順序であった。到着後、直ちに大使館、領事館で試演会が行なわれており、そこで、慰問演奏等の滞在中の日程が決められたようである。大使館は活動の拠点であり、練習場所でもあった。ペトログラードにおいて、本野駐露大使は多くの便宜を図ったとみられる。

旅行の主眼である慰問演奏は、2都市で23回に及んだ。慰問先は、日本赤十字病院（[12][25]）、陸軍病院[41]のほか、宮殿内の皇后陛下御親裁の病院[15]も含まれていた。当初は大使の斡旋によるものと思われ、大使だけでなくロシア政府の要人も列席し、広く要人の関心を引くものであった。その後は現地の人々からの申込みによって演奏会が増え、ペトログラードでは滞在を延長することになった。モスクワでは多数の申込みに応じきれずに「悉く拒絶する事とした（『楽報』78号：70）」とされ、一行の演奏は、現地の人々に相当な印象を与えたものと想像できる。また、歓迎会および公開演奏会（[27][44][35]）は、いずれも現地の芸術家の発起によるもので、160人から200人の観客を集め、なかでも公開演奏会[35]は、座席は完売し、立ち見も出たほどの好評で、興行面でも利益が出たが、寄付したという。これは、彼らに演奏が認められたことを物語っている。これによって、単なる慰問旅行にとどまるものではなく、都山の「国際的印象を残す」ねらいが理想的な形で実現したことになる。

そのほか、モスクワ、ペトログラードにおいて、個人が主催した音楽会（[10][13]）もあったが、これは現地のロシア人の強い関心を引いたことがうかがえる出来事である。表2には記載していないが、シベリア鉄道の車中でも演奏しており、一行が演奏を楽しんでいた様子もうかがえる。また、現代では通常行なわれないアンコールに応じ（[12][26][35]など）、ロシア人もそれに応じて自らの音楽や舞踊を披露するという（[24][27][42]など）、いわば文化交流が頻繁に行なわれたことも興味深い。

以上のように、慰問演奏が申し込みによって増加し、滞在が延長されたことのみをみても、旅行が成功であったことを指摘できるであろう。さらに、ペトログラードとモスクワでは歓迎会、ペトログラードでは芸術家が主催した公開演奏会も企画されたことから、単に慰問の趣旨が理解されたというだけでなく、演奏の技量も評価を得たとみてよいのではないだろうか。

【表2】旅行中の演奏一覧

*『日記』をもとに『楽報』によって補足し、福田が作成した。演奏会の情報は『楽報』よりも『日記』のほうが多かった。『日記』と『楽報』での記述の相違は以下のとおり。

会場名：[5]は『楽報』では「晩会」。[28]は『楽報』では「鉄道省」。[40]は『楽報』では「商業協会病院」。

曲名：[12]の《八段の調》は『日記』では《六段の調》だが、『楽報』にしたがった。[35]の《霜夜》は『楽報』では《朝霧》。

楽器編成：[1]の《千鳥の曲》は『日記』では「箏三弦」だが、『楽報』にしたがった。[1]の《岩清水》は『楽報』では「都山/細田」。[13]の《七小町》は『楽報』では「箏尺八」。[37]の《千鳥の曲》は『日記』では「尺八」だが、『楽報』の「箏尺八」にしたがった。[38]は『日記』には編成の記載がなく、『楽報』にしたがった。

*「日時」には、日時および開始時間を記した。

*「会場等」では、①開催地、②会場、③趣旨、④主催あるいは開催の経緯、⑤聴衆、⑥その他、の各事項を記した。①開催地は、「ウ」はウラジオストック、「ペ」はペトログラード、「モ」はモスクワを表す。

*「曲名と楽器編成」では、曲名が不明の場合は曲数のみ記し、曲名の表記は、通称が用いられていたものも統一した。楽器編成も表記の統一を図り、3種の楽器による合奏の場合は「三曲」と記した。独奏および2種の楽器による合奏の場合は楽器名を簡潔に記したが、[8]のように「箏」の表記でも箏独奏と箏2面の両方の可能性があるがあるので、「箏」「箏独奏」「箏2」の表記は区別した。なお、敦賀[1]と京城[48]については、演奏者名を記した。また、演奏頻度の高い《残月》《青海波》等について楽器編成の省略がみられたが、ほかの演奏例に倣った。

| 番号 | 日時 | 会場等 | 曲名と楽器編成 |
|-----|----------------|---|--|
| [1] | 7月30日 19:00 | ①日本②敦賀町笹谷座③都山師渡露記念演奏会④都山流北陽会主催⑤満員（ロシア人男女10数名を含む） | 1.《春の曲》細田都揚/箏2 2.《霜夜》都山/細田 3.《明治松竹梅》箏2 4.《残月》都山/親敏/輝子 5.《笹の露》細田/箏/三弦 6.《岩清水》都山独奏 7.《千鳥の曲》細田/箏2 8.《御山獅子》都山/細田/親敏/輝子 |
| [2] | 8月1日 21:00 | ①日本海②鳳山丸船上の二等食堂③船長はじめ事務長、乗客。洋人15,6名 | 1.《八段の調》箏三弦 2.《青海波》尺八 3.《千鳥の曲》箏尺八 4.《越後獅子》三曲 |
| [3] | 8月3日 20:30 | ①ウ②日本領事館③試演会④野村領事主催⑤在留邦人約30名、ロシア新聞記者その他8名 | 1.《八段の調》箏三弦 2.《春の光》尺八 3.《千鳥の曲》箏2尺八 4.《御山獅子》三曲 5.《明治松竹梅》箏2尺八 |
| [4] | 8月4日 20:00 | ①ウ②徳永塘（宿泊所）階上③演奏会④在留邦人10名主催⑤邦人約150名、ロシア人館外で立聞き⑥ロシア初の演奏会 | 1.《千鳥の曲》箏尺八 2.《夏の曲》箏2 3.《今小町》三弦尺八 4.《春の寿》箏三弦 5.《岩清水》尺八 6.《残月》三曲 |
| [5] | 8月9日 11:00 | ①ウ②曙会事務所③演奏会④曙会主催 | 1.《千鳥の曲》箏2尺八 2.《残月》三曲 3.《松竹梅》三弦尺八 4.《越後獅子》三曲 5.《磯千鳥》三曲 6.《笹の露》三曲 |
| [6] | 8月11日 | ①ウ②西本願寺③演奏会④西本願寺婦人会主催 | 1.《千鳥の曲》箏尺八 2.《越後獅子》三曲 3.《茶音頭》三弦尺八 4.《小督の曲》箏独奏 5.《青海波》尺八 6.《八段の調》三曲 7.《松風》箏尺八 8.《御山獅子》三曲 |
| [7] | 8月12日 夜 | ①ウ②オキヤンスカイ学生遊園③慈善会の音楽会④浦潮学務監督官より申込み。男女学生幹旋による学生後援慈善会主催。一行は音楽会の最後に出演。⑤富豪の家族、市内の人々、軍人学生2000余名 | 1.《八段の調》三曲 2.《青海波》尺八 3.《楓の花》（手事のみ）箏2尺八 |
| [8] | 8月14日 18:00 | ①ウ②日本小学校③同校基本金寄附のため⑤300余名 | 1.《六段の調》三曲 2.《秋の曲》箏尺八 3.《記念の鷹羽》箏独奏 4.《霜夜》尺八 5.《笹の露》三曲 6.《千鳥の曲》箏独奏 7.《松竹梅》三弦尺八 8.《明治松竹梅》箏2 |
| [9] | 8月19日 夜 | ①ハルピン②東洋館（宿泊所）広間 | 1.《磯千鳥》箏三弦 2.《千鳥の曲》箏尺八 3.《越後獅子》三曲 4.《小督の曲》箏 5.《青海波》尺八 6.《明治松竹梅》箏尺八 7.《御山獅子》三曲 |

| | | | |
|------|----------------|---|--|
| [10] | 9月5日 14:00 | ①モスクワ郊外のウィブノウェ村②実業家の別荘④実業家ウエレス・チャーギン氏の招待⑤チャーギン氏の知人数名⑥終了後にロシア人によるピアノ演奏 | 1.《御山獅子》三曲 2.《千鳥の曲》箏 3.《春の光》尺八 4.《砧》三弦 5.《六段の調》三曲 |
| [11] | 9月8日 21:00 | ①ペ②日本大使館③試演会④本野駐露大使の招待⑤大使夫妻および館員武官等約17,8名 | 1.《八段の調》箏三弦 2.《千鳥の曲》箏尺八 3.《小督の曲》箏独奏 4.《岩清水》尺八 5.《御山獅子》三曲 |
| [12] | 9月12日 14:00 | ①ペ②日本赤十字救護班病院③慰問⑤患者約100名、看護婦他15,6名、ロシア人武官20名、大使夫人 | 1.《夜々の星》三曲 2.《八段の調》箏三弦 3.《春の光》尺八 4.《御山獅子》三曲 En.1.《六段の調》三曲 En.2.《千鳥の曲》箏尺八 |
| [13] | 9月13日 | ①ペ②大使館付武官小田切大佐宅④小田切大佐の招待⑤武官と看護婦約17名 | 1.《明治松竹梅》箏尺八 2.《七小町》箏三弦 3.《青海波》尺八 4.《越後獅子》三曲 |
| [14] | 9月14日 20:30 | ①ペ②大使館ダンス広間④大使主催⑤武官、実業家約36,7名⑥演奏後の余興で《君が代》吹奏 | 1.《春の曲》箏尺八 2.《熊野》箏 3.《岩清水》尺八 4.《さむしろ》箏三弦 5.《青海波》尺八 6.《あれ鼠》三弦 7.《残月》三曲 |
| [15] | 9月16日 | ①ペ②サルスコエセロ宮殿内の露国皇后陛下御親裁の病院③慰問⑤患者40名、看護婦医員20数名、内親王殿下2名 | 1.《八段の調》三曲 2.《春の朝》箏三弦 3.《春の光》尺八 4.《残月》三曲 |
| [16] | 9月17日 14:00 | ①ペ②ノーウォエ・ウレーミヤ社(ロシア第一の新聞社)病院③慰問 | 1.《御山獅子》三曲 2.《七小町》箏三弦 3.《春の光》尺八 4.《残月》三曲 5.《楓の花》箏 En.《夜々の星》三曲 |
| [17] | 9月17日 | ①ペ②大使館⑤大使、島定治郎氏一行 | 《寒月》尺八 |
| [18] | 9月19日 14:00 | ①ペ②芸術家病院③慰問⑤患者700名 | 1.《御山獅子》三曲 2.《軍人の曲》箏 3.《春の光》尺八 4.《残月》三曲 En.《君が代》尺八 |
| [19] | 9月19日 18:00 | ①ペ②貴族会館③慰問⑤患者400名 | 1.《御山獅子》三曲 2.《軍人の曲》箏 3.《春の光》尺八 4.《残月》三曲 En.《君が代》尺八 |
| [20] | 9月19日 20:30 | ①ペ②小田切大佐宅③ペ市邦人実業家連の招待 | 5曲 |
| [21] | 9月20日 14:00 | ①ペ②貴族病院③慰問 | 4曲 |
| [22] | 9月20日 | ①ペ②参謀本部病院③慰問 | 4曲 |
| [23] | 9月21日 | ①ペ②工芸大学内の病院③慰問⑤患者約900名 | 5曲 |
| [24] | 9月21日 | ①ペ②交通省病院③慰問⑥終了後に兵士によるバラライカの演奏 | 4曲 |
| [25] | 9月22日 15:30 | ①ペ②日本赤十字救護班病院③慰問 | 5曲 |
| [26] | 9月23日 16:00 | ①ペ②市立病院③慰問 | 5曲 En.《君が代》尺八 |
| [27] | 9月24日 20:00 | ①ペ②大使館③歓迎会④芸術家団の招待⑤芸術家約50名、その知人および大使夫妻、大使館員等約100名⑥終了後にピアノ、チェロ等の演奏 | 1.《六段の調》三曲 2.《砧》三弦独奏 3.《岩清水》尺八 4.《千鳥の曲》箏尺八 5.《御山獅子》三曲 6.《春の光》尺八 |
| [28] | 9月25日 15:00 | ①ペ②鉄道官病院③慰問⑥終了後に兵士による歌唱 | 3曲 |

| | | | |
|------|-----------------|--|---|
| [29] | 9月26日 | ①ペ②チエレミシノヴ女史（彫刻家）宅 ③都山の彫像制作の御礼⑤女史 | 1.《朝霧》尺八 2.《若葉》尺八 3.《今小町》尺八 |
| [30] | 9月27日 16:00 | ①ペ②聖十字架病院③慰問 | 4曲 |
| [31] | 9月28日 20:00 | ①ペ②日本病院の篤志看護婦カズ子宅⑥ カズ子ほかピアノ演奏 | 3曲 |
| [32] | 9月29日 | ①ペ②ノーウォエ・ウレーミヤ病院③慰 問 | 5曲 |
| [33] | 9月30日 | ①ペ②外務省立病院③慰問⑥ロシア外務 大臣夫妻、大使夫妻 | 7曲 |
| [34] | 9月30日 | ①ペ②大使館③来客の為 | 4曲 |
| [35] | 10月1日 20:30 | ①ペ②露国帝室音楽学校内演奏場③日本 音楽会（公開演奏会）④24日に申込み。 芸術家数10名の発起。⑤座席券完売。臨 時券発行。立ち見も。 | 1.《七小町》箏三弦 2.《磯馴松》尺八 3.《楓の花》箏独奏 番外.《残月》三曲 4.《富士太鼓》三弦連奏 5.《霜夜》尺八 En.1.《君が代》尺八 En.2.《夜々の星》三曲 |
| [36] | 10月3日 午後 | ①ペ②日本大使館③送別 | 《越後獅子》三曲 |
| [37] | 10月4日 夜 | ①モ②日本領事館③試演会 | 1.《七小町》箏三弦 2.《千鳥の曲》箏尺八 3.《砧》三弦 4.《青海波》尺八 |
| [38] | 10月7日 19:00 | ①モ②市立病院③慰問⑥終了後に兵士に よる歌唱 | 1.《御山獅子》三曲 2.《楓の花》箏独奏 3.《春の光》尺八 4.《七小町》三曲 En.《残月》 |
| [39] | 10月8日 | ①モ②クレムリン宮病院③慰問 | 4曲 |
| [40] | 10月8日 19:00 | ①モ②音楽協会病院③慰問⑤市長来場。 約700名。 | 5曲 |
| [41] | 10月9日 15:00 | ①モ②陸軍第十八病院③慰問⑤患者700 名 | 4曲 |
| [42] | 10月9日 18:00 | ①モ②モスクワ総監病院③慰問⑤平田領 事⑥終了後に兵士によるバラライカ、マ ンドリン、ギターの演奏 | 4曲 En.2曲 |
| [43] | 10月9日 21:00 | ①モ②日本領事館④在留日本人会 | 数曲 |
| [44] | 10月10日 14:00 | ①モ②芸術座高等学院③歓迎会④モスク ワ市芸術家⑤芸術家200余名、市長、領事 夫妻⑥終了後に兵士による歌唱 | 1.《八段の調》箏三弦 2.《楓の花》箏 3.《春の光》尺八 4.《残月》三曲 5.《青海波》尺八 |
| [45] | 10月10日 | ①モ②芸術座高等学院内病院③慰問 | 4曲 |
| [46] | 10月10日 19:00 | ①モ②仏蘭西病院③慰問 | 4曲 En.2曲 |
| [47] | 10月11日 | ①モ②グチコフスキー病院③慰問④一仕 官の申込み | 4曲 En.1.《青海波》尺八 En.2.《君が代》尺八 |
| [48] | 10月25日 16:00 | ①京城②千代本③歓迎会 | 1.《千鳥の曲》中菅検校/都山 2.《岩清水》都山 |

5. 曲目と楽器編成

旅行中に演奏された曲目は、表3に示した37曲であり、演奏曲ののべ数は230曲を超える。そのうち139曲は、曲名と楽器編成が明らかである。徳丸吉彦は、三曲の演奏会の演出においては、楽器の多様な組み合わせが可能であるので、「曲目を選んだら、それをどのような編成で演奏するかまで決定しなければならない（徳丸2004：166）」と述べている。そこで、楽器編成に着目し、尺八と地歌箏曲の曲目についてまとめたうえで、都市別の特徴を検討していく。なお、尺八は都山の演奏であることが自明であるが、三弦と箏は、地歌箏曲家である親敏と輝子がどちらも演奏可能であった。箏三弦の合奏の場合には、親敏が三弦、輝子が箏を受け持ち、三弦独奏の場合は親敏が演奏したと思われる。

尺八の曲目は、《君が代》を除いて、すべて都山の作品、つまり都山流の尺八本曲であった。旅行前

【表3】曲名と楽器編成

*表2をもとに福田が作成した。1つのマス内の数字は、3ヶ所の場所別に演奏回数を示す。
左:敦賀～ハルピン([1]～[9])、中央:ペトログラード([10]～[36])、右:モスクワ～京城([37]～[48])。

| 曲種 | 曲名 | 尺八 | 箏 | 三弦 | 箏三弦 | 箏尺八 | 三弦尺八 | 三曲 |
|-----------|-------|--------|--------|--------|--------|-------|-------|-------|
| 段物 | 六段の調 | | | | | | | 1,3,- |
| | 八段の調 | | | | 2,2,1 | | | 2,1,- |
| 砧物 | 砧 | | | -2,1 | | | | |
| 手事物 | 御山獅子 | | | | | | | 4,7,1 |
| | 残月 | | | | | | | 3,6,2 |
| | 越後獅子 | | | | | | | 4,2,- |
| | 七小町 | | | | -3,1 | | | -,-,1 |
| | 笹の露 | | | | | | | 3,-,- |
| | 夜々の星 | | | | | | | -3,- |
| | 磯千鳥 | | | | 1,-,- | | | 1,-,- |
| | 松竹梅 | | | | | | 2,-,- | |
| | 今小町 | -1,- | | | | | 1,-,- | |
| | 茶音頭 | | | | | | 1,-,- | |
| | 松風 | | | | | 1,-,- | | |
| | 春の寿 | | | | 1,-,- | | | |
| | さむしろ | | | | -1,- | | | |
| | 富士太鼓 | | | | -3,1,- | | | |
| 作物 | あれ鼠 | | | -3,1,- | | | | |
| 幕末 新箏曲 | 千鳥の曲 | | 1,1,- | | | 7,3,2 | | |
| | 春の曲 | | | | | 1,1,- | | |
| | 夏の曲 | | 1,-,- | | | | | |
| | 秋の曲 | | | | | 1,-,- | | |
| 明治新曲 | 楓の花 | | -2,2 | | | 1,-,- | | |
| | 明治松竹梅 | | 2,-,- | | | 2,1,- | | |
| 山田流 箏曲 | 小督の曲 | | 2,1,- | | | | | |
| | 記念の鷹羽 | | 1,-,- | | | | | |
| | 熊野 | | -3,1,- | | | | | |
| 曲種不明 | 軍人の曲 | | -2,- | | | | | |
| | 春の朝 | | | | -3,1,- | | | |
| 尺八本曲 | 青海波 | 4,2,3 | | | | | | |
| | 春の光 | 1,7,2 | | | | | | |
| | 岩清水 | 2,3,1 | | | | | | |
| | 霜夜 | 2,1,- | | | | | | |
| | 朝霧 | -3,1,- | | | | | | |
| | 磯馴松 | -3,1,- | | | | | | |
| | 若葉 | -3,1,- | | | | | | |
| その他 | 君が代 | -4,1 | | | | | | |

に作曲されていた都山の作品は13曲あったが、この旅行で用いられたのは一部であった。尺八二部合奏、四部合奏の曲も含まれるが、当然ながら独奏で演奏された。《君が代》は、[14]の余興ではじめて演奏された後、たびたび演奏された。なお、《青海波》は、日露戦争中に作曲された曲で、末尾には《君が代》の旋律が用いられているものである。

地歌箏曲の曲目は、段物、手事物、幕末新箏曲、明治新曲が好まれ、箏組歌や端歌がみられなかった。器楽性の強い曲目が好まれたなかで、[14]で演奏された語りの性格を強くもつ作物《あれ鼠》は、異色といえる。また、山田流の《記念の鷹羽》は日露戦争中に作曲された初代萩岡松韻の作品である。現代では生田流の演奏家が山田流の曲を演奏することはめずらしいが、親敏は、山田流の拠点である東京に在住していた折に習得したのかもしれない。《小督の曲》《熊野》は山田流の有名曲で、《小督の曲》は、生田流勢力下の京阪でもたびたび演奏例がみられたものである。

都市ごとに曲目を検討すると、ウラジオストックまでとその後でちがいがみられる。ウラジオストックまでは、多様な曲目が演奏され、そのなかで比較的多かったのが、合奏では《八段の調》《千鳥の曲》《越後獅子》《御山獅子》、尺八独奏では《青海波》であった。[5]に代表されるように、ほとんどの曲において尺八が加わった。また、[7]の《楓の花》は手事のみを演奏したが、尺八奏者にとっては聴かせどころとなり得ない歌の部分を省略したとも考えられる。以上のように、ウラジオストックまでの演奏会は、あたかも都山が主催し、米川夫妻が助演を務める尺八演奏会の様相を呈していた。

ペトログラードとモスクワにおいては、《六段の調》《御山獅子》《残月》《楓の花》が増え、《千鳥の曲》は引き続き多く、尺八独奏では《青海波》《春の光》《君が代》が中心となった。[14]のように例外的な選曲もあるが、繰り返し行われた慰問演奏では、これらの曲が定番曲として用いられた。また、楽器編成については、三弦と尺八の合奏は演奏されなくなり、《楓の花》は箏のみで演奏されるようになり、そのほかの曲についても全体に尺八が加わらない場合が増加した。それにとまって、[12][15]の慰問演奏にみられるような、《御山獅子》《夜々の星》などの2曲の3種の楽器による合奏の間に、都山の尺八独奏と米川夫妻の演奏（三弦、箏、三弦と箏のいずれか）が挟み込まれるプログラムのパターン、いわば分担型のパターンが生まれた。慰問演奏に関しては、『日記』『楽報』において「同様に」「例のごとく」として曲目が省略されている場合もあるが、これも同じパターンであろう。多少の例外はあるものの、ウラジオストック最後の[8]から、米川夫妻のみの演奏が2曲ずつに増え、モスクワで最初の演奏となる[10]でこのパターンがはっきりとみられる。しだいに箏三弦のみを聴かせる曲目がプログラムにおいて重要性を増したとみることができる。歓迎会と公開演奏会（[27] [35] [44]）は、一行の芸術性を大いに発揮する場であったと思われるが、このパターンが応用されている。この分担型のパターンは、都山と親敏夫妻がバランスよく出演し、それぞれが技量を発揮する、三曲のジョイント・コンサートのようなプログラムともいえるであろう。したがって、旅行の行程が進むにつれ、尺八演奏会から三曲演奏会へ移行したとみることができるのである。

なお、都山と親敏の手付について、表2および表3より明らかになる点について指摘しておく。

- (1) 《砧》は、現在は、親敏の系統のみに伝承される曲で、親敏の手付による華麗な箏と合奏で演奏されるが、旅行中は三弦の独奏で演奏されており、箏の手付はまだなかったようである。
- (2) 《春の寿》には、現在、親敏の箏の手付が伝承されており、ここで披露されたのが親敏の手付である可能性が高い。手付の年代は不明であるのだが、旅行時を下限とみなすことができるであろう⁶。
- (3) 《春の寿》《富士太鼓》はそれぞれ箏三弦、三弦連奏で演奏されているので、旅行時にはまだ尺八の手付はなかったのかもしれない。一方、《さむしろ》も旅行中は箏三弦のみであったが、この曲については、都山は活動の初期から尺八の手付を用いていた。
- (4) 《七小町》は、最後の演奏 [38] のみ尺八が加わっている。都山が旅行中に尺八の手付を行い、[38]がその初演であった可能性もある。都山流の演奏会において、《七小町》の尺八の演奏例がはじめて確認できるのは旅行後の1915年2月5日（『楽報』82号：38）だからである。ただし、これは『楽報』の記載に基づく仮定で、『日記』には[38]の編成が記載されていない。

6. まとめ

この旅行は、はるか90年前の出来事であるが、現代の私たちに大きな刺激を与えるものである。計画は再三にわたって変更され、結果的にシベリア鉄道でヨーロッパ東端のペトログラードとモスクワに至り、現地の人々の発起による演奏会開催が実現し、傷病兵慰問という目的を超えてロシアで好評を博し、一流の演奏家がヨーロッパに本格的な三曲を紹介した先駆けとなった。これは、すでに名声のあつ

た演奏家らが遺憾なく本領を發揮した結果であり、彼らの行動力と演奏技術に負うところが大きい。また、曲名と楽器編成を考察した結果、米川夫妻の箏三絃の役割は重要で、都山の尺八公演というよりは、都山と米川夫妻のジョイント・コンサート、つまり三曲公演とみるべきであろう。

三曲史において大正時代は、近代化が本格的に始まった時代である。都山と琴翁（親敏）は、それぞれさまざまな新しいことに挑戦した人物であり、まさにこの時代を象徴する人物といえる。そして、この旅行は、邦楽の開拓の扉を華麗に彩るものといえるであろう。

注

- 1 初期に三曲を欧米に紹介した例として、1899年から数年に渡り欧米で興行を行った川上音二郎一座がある。一方、三曲の専門家によるものは、都山らの旅行後、1923年の吉田晴風の訪米まで待つことになる。
- 2 上参郷による「(都山が) 日露親善のため箏曲家米川(親敏) 琴翁夫妻とロシアに演奏旅行(上参郷 1989: 707)」という記述は適切と考えられるが、それ以前のものでは、私的な旅行であったのに「親善使節(藤田 1969)」とされる表現、あるいは「中尾都山ロシアを訪う(大野 1966: 154)」と、都山ひとりによる短期の訪問のような表現がみられる。
- 3 この旅行記の筆者は不明であるが、記述方法は第三者が記述した形態をとっており、掲載号は都山の旅行期間中から帰国後にかけて発行されているので、都山自身が頻繁に書き送っていた葉書と書簡をもとに、会員が記述したと推測できる。一方で、これを『都山流百年史』では都山が執筆したとみなしており、これにしたがえば、都山が自ら第三者の見聞記として書いた可能性もある。
- 4 引用にあたり、旧字体はすべて新字体に改めた。
- 5 この計画の場となった牧野直山の披露演奏会は、プログラム(『楽報』74号: 45)では19日、傍聴記(74号: 61-62)と都山の寄稿(75号: 24)では20日となって、相違が生じている。
- 6 『楽報』所載の「庸山師昇格披露会(59号: 54)」は、1914年3月15日に岡山市で行われた演奏会の傍聴記であるが、そのなかで、「来賓たる箏曲師匠は箏三弦合奏の『春の寿』を演じ」とある。箏曲師匠は不明であるが、1912年に姫路に移住した直後、和氣島庸山と交流があった親敏である可能性もある。そうすると、手付の年代はさらに1914年までさかのぼることができる。なお、1914年6月28日都山流狭霧会演奏会のプログラム(『楽報』63号: 30)には、尺八の地方として《春の寿》を盲人2名が箏で演奏した記録があるが、この曲は原曲が三弦であり、尺八の手付は旅行中の都山でさえ演奏していないので、これは別曲ではないだろうか。

引用文献(原資料となる文献は資料1~4に掲載)

大野恵造(編)

1966 「三曲略年表」藤田俊一(代表)『現代・邦楽名鑑(一) 三曲編』東京: 邦楽と舞踊社: 139-159.

上参郷祐康

1989 「中尾都山」平野健次; 上参郷祐康; 蒲生郷昭(監修)『日本音楽大事典』東京: 平凡社: 707-708.

田中義一

1989 『中尾都山の生涯』東京: ホーオー堂.

【徳丸吉彦先生古稀記念論文集】

徳丸吉彦

2004 「日本音楽における演出」小山弘志（編）『日本の古典芸能における演出』東京：岩波書店：147-171.

都山流史編纂委員会（編）

1998 『都山流百年史』京都：都山流史編纂委員会.

藤田俊一

1969 「米川琴翁師逝く」『日本音楽』1,2,3月合併号：24.

森田柗山

1999 「百年史拾遺（二）—プラットホームの写真—」『楽報』880号：4-7.